

「人間不信」を克服する

園長 児嶋 草次郎

菩薩の用心は皆、慈悲を以て本（もとい）とし、利他を以て先（せん）とす 空海

あけましておめでとうございます。

12月半ばまで咲いていた花壇の秋の花々もすっかりなくなり、強い霜も何度か降りて、風景はすっかり冬。日本スイセンが咲き始め、梅の蕾もふくらんで、新しい年2025年（令和7年）を迎えています。今年には太平洋戦争敗戦後80年の年であり、石井記念友愛社創立80周年の年でもあります。昨年に引き続いて大事な年でもあります。

人類の歴史は、殺りくと戦争の歴史であったように思いますが、その歴史から学ばず、今も人間同志の殺し合いをやっている国もあり、人間とはなんと愚かな動物なのだろうと思うことが度々あります。災難は忘れた頃にやってくると言いますが、日本がまきこまれないように切に願います。

能登半島地震でも多くの方が被災する中で、私たちの見えない所で様々な助け合い、ボランティアが行われていることを再確認し合い、スタートしたいと思います。そして、戦争のない世界を実現するための努力を、新たな決意で始めなければなりません。

子供たちをめぐる社会状況も、決して良い方向に進んでいるとは思えませんが、社会の上すべりの施策に流されないように、しっかり自立支援していきたいと思います。

今年も、御指導・御支援、よろしくお願い致します。

以下、クリスマス会の時に子供たちに話したことです。

クリスマス、おめでとうございます。今日は12月22日ですから、いつもより少し早いクリスマス会です。24日のイブには、中・高生の子供たちは、みんな石井十次先生のお墓にお参りし、この1年の反省と、来年に向けての決意を大きな声で報告することになっています。みんなもそれぞれ、今年は何を言おうかとあれこれ考えている時ではないかと思えます。私もこの1年を振り返りながら、来年のあるべき行動を考えています。

世界へ目をやると、ロシア・ウクライナ戦争はまだ終わっていません。今までの戦いでロシア側の兵士の死者は11万～16万人、ウクライナ側の兵士の死者は4万3000人ほどだそうです。ウクライナは民間人も多く亡くなっていますので、それを含めるともっと増えると思います。終るどころか、北朝鮮がロシア側に加わって一緒に戦い始めています。

一方、イスラエルとハマスの戦争も1年たつのにまだ終わってなく、45000人以上の人々が亡くなったということです。それどころか中東地域に拡大しつつあり、そのあおりを食って、シリアの独裁政権が崩壊し、アサド大統領がロシアに逃亡したというニュースも飛びこんで来ました。

戦争だけではなく、天災も次々に襲って来ています。能登半島地震が発生したのは、今年の1月元旦でした。津波被害もあり、関連死も含めて今までに500人以上の方が亡くなっています。家を失った

人も多くおられるのですが、不安な正月を迎えられることになります。

地球温暖化のせいで、今年は夏が長く天候不順も度々ありました。しかし、友愛園では、いくつか、うまくいかなかったものもありますが、米や野菜類はほぼ順調に育ちました。収穫感謝祭にも多くの方々に来ていただき、ともに収穫を喜んでいただき、こうしてその後、平和にクリスマス会も迎えることができることは、広い世界状況、社会状況の中では幸せなことだと思います。そのことをお祝いしたいし、感謝したいと思います。

しかし、この幸せ、平和がこれからも続くのか、その保証はありません。今日は、それぞれに与えられたチャンスを生かし、世の流れに流されず、運命を変える生き方について考えます。

今年は、6人の高校3年生がいます。それぞれに、連絡が決まって来ています。ここはみんなも知っているように、家庭ではありません。児童養護施設です。それぞれに家庭に事情があって、みんなはここで集団生活をしています。私は最近、ここは、生活習慣と心のリハビリ施設ではないかと思うようになって来ています。あるテレビ番組で見たのですが、脳梗塞等で倒れて半身不随になった人たちや、もう寝たきりだろうと言われた人たちが、厳しい機能訓練をして社会復帰をはたすのです。寝たきりになっていた人が、理学療法士の厳しい特訓に耐えて、歩いて病院を退院していく姿は感動的です。他人依存的に身を理学療法士にゆだねれば、歩けるようにしてもらえるわけではありません。自ら、強い決意と意志と忍耐力で修行しなければ歩けるようになれないのです。その状況をみながら、友愛園の生活も一緒だなと感じました。

今年も収穫感謝祭の時に、中学生以上のみんなは、それぞれに「労作作文」を書き発表しました。私は毎年楽しみにしています。その子の成長を感じ取ることができるからです。今年も感動的な作文がいくつもあり、私は涙をぬぐいながら読みました。その中で高3のともな・せいな双子兄弟の作文が目をはきました。「明倫塾」や「反省会」でも話したのですが、みんなにとっては大事なことなので、ここでまた話します。

その中に次のような文がありました。この「労作作文」の中にこの言葉が出て来たのは、この20年か30年の中で初めてだと思います。

「私は小学校4年生から友愛園に来ました。生まれながら色々な場所を転々としてきたので、友愛園に来て初めは、人を信じる事が出来ずに、将来のことなどは少しも考えていませんでした。一日一日が精一杯で将来を考える余裕もなかったのだと今は思います。」(ともな)

「私は小学校四年生のときに友愛園に入所しました。友愛園に入る前は三年間里親さんと生活をしていましたが、そこでの関係は正直あまり良いものではありませんでした。そこでの生活を通してあまり人を信用することが出来なくなってしまいました。」(せいな)

この言葉とは、つまり「人間不信」です。自分たちは「人間不信だった」と分析できているのです。ここにいるみんなもおそらく、自覚できているか否かは別とし、ここに来た時は同じ心境だったと思います。親から引き離されることほど子どもにとって悲しいことはありません。人間は動物ですから、他の動物が親子を分離された時の子供の状態を見ているとよく分かります。ノラ猫が親を求めて鳴く姿をみんなもみることがありますね。それではその心境とは、日常生活の中でどのような症状として現れるのか。まず常にマイナス思考です。人の注意や助言を素直に受け取れない。そして、グチや不満がいつも口から出てしまう。しかし、心情としては、自分を人間不信とは思いたくない。そういう言葉も思いつかない。ともな・せいな君がこの言葉を冷静に使えるようになるまでに9年かかっています。人間の人格を変えることは、それほど難しいということだと思います。

中学生以上の子ども達が日々記録している「生活手帳」に、「運命を変える法則」というのが載ってい

ます。昔、私が何かの本で見つけて、すばらしいと思い転載した言葉です。読みます。

「心が変われば態度が変わる 態度が変われば行動が変わる 行動が変われば習慣が変わる 習慣が変われば人格が変わる 人格が変われば運命が変わる 運命が変われば人生が変わる。」

心が変われば人格が変わり、すぐに運命が変わると短絡的にいかないところが人間という動物の難しいところです。いくつものハードルを越えていかねばならない。みんなが、マイナス思考をプラス思考に変えようと思ってもなかなかかえられないことは、日々実感しているところです。

みんなは色々な事情で入ってくるのだけでも、いつまでも恨み辛みを抱えていても未来は開けません。心を整理するために、みんなは日記を書いています。日記に書いているうちに、客観的にモノゴトを見る目も養われていきます。この心が少し変わると態度に現れます。この態度を変えるためのものが「生活手帳」です。しかし、態度というのは、日々気分です。常にブレてしまいます。この態度を定着させるものが、日々の行動です。行動とは、生活習慣もそうだし、労作もそうです。さきほどここは生活習慣と心のリハビリ施設ではないかと書きましたが、ここへの修行のことを表現しています。友愛園の規則正しい生活と日々の掃除や労作を年間 365 日重ねていくこと、それが行動です。

その積み重ねで生活習慣として身につけていきます。しかし油断すればすぐ後もどりします。ここが友愛園の生活で重要なところです。そして、「運命を変える法則」には、「習慣が変われば人格が変わる」と書いてあります。人格が変わるということはどういうことなのか。みんなが労作作文の中にも書いているのですが、自信、自己コントロール力、忍耐力、自己肯定感、誇り等を身につけるといことです。いつの間にか、グチや不満が少なくなり、プラス思考で生きようという気持ちになっています。将来の夢や志もできて来て、自主的に前を向いて生きようという姿勢になります。ここまで来たらしめたもので、運命も自然に変っていきます。

ともな・せいな君が人格が充分に確立できたとはまだ思えませんが、過去の整理は大分できて来ただろうと思います。そういう余裕ができて来たから、振り返って、ああ、あの頃は人間不信に陥っていたのだろうなど、客観的に自分を評価できる。繰り返しますが、ここまで来るのに二人は9年かかっています。

小学校時代は、みんな訳がわからないまま生活している。しかし中学生にあがったら、それぞれに、この原則に従って成長していつている。行ったり来たりしながらも一段一段前に進んでいるのだろうと思います。私はこのリハビリ、つまり修行の期間は3年間から6年間は必要ではないかと経験上感じています。人間の心、広く言えば人格はそんなに簡単に換えられるものではないのです。

早く家庭復帰をめざすものは、短期決戦ですので、ここから自立をめざすものより、厳しい努力が必要です。

ところで、話が変わりますが、これもみんなには何度か話して来たことです。国は、この社会的養護のしくみを大きく変えようとしています。一言で言うならば、「家庭優先の原則」です。あたり前と言えばあたり前のことで、この世に生まれ落ちて、育つ環境は自分の家庭が一番良いとは誰もが思っています。しかし、様々な事情で親と一緒に暮らせなくなったからここに来ている。

国が考えている「家庭優先の原則」とは、里親の家は一つは家庭であるので、施設よりは里親宅で生活させることを優先させようということです。幼児さん以下は75%以上、小学生以上は50%以上を里親さんの所で生活させようと考えています。そうさせることで子供たちは幸せになると信じているわけです。ともな・せいな君は里親さんの所で生活した経験があるので、そうとも限らないということが分かっていますが、国の政策とは恐ろしいもので、そう決まったら、どんどんその方向に進んでいきます。

もう一つ、国は、施設生活をできるだけ短くしていこうとも考えています。これも考えてみればごく

当然のことで、抱えている課題が解決したのであれば、どんどん家庭復帰すればよい。問題は、課題が解決していないのに家に帰されるケースが今後出て来る可能性がおおいにあるということです。『少々問題があっても施設よりは家庭の方がまし』、そのような偏見が偉い人たちの中にはあるのではないかとも思います。

子供にとって一番重要なことは、目先のことではない。将来の自立に向けて、運命を変えるチャンスが平等に与えられることだと思います。

来春、ともな・せいな君を含めて4人が福祉系の大学・短大に進学します。今、国がやろうとしていることは、ほんとうにそれぞれの子供たちにとって、自立の道筋になり得るのか、研究してみたいと思います。

厳しい社会状況の中で良いこともありました。大谷翔平選手が米大リーグで、歴史的な大活躍をしたことです。左肩を負傷してピッチャーとしての出番はないのだから普通だったらマイナス思考に陥るのに、メジャー史上初の「50本塁打、50盗塁」を達成しました。

彼の花巻東高校時代の寮生活で学んだ「プラス思考」もみんな学びましたが、彼の見えない努力にみんなも学んでほしいと思います。

来年が、この一人ひとりにとって、より希望の持てる1年になることを祈りたいと思います。